

『舍利弗悔過經』試訳

中御門 敬教

はじめに

現在、筆者は華嚴思想の要約とも言える〈普賢行願讃〉と、その先行經典（『舍利弗悔過經』・『三曼陀跋陀羅菩薩經』）との関係に関心をもっている。この中の『舍利弗悔過經』には、静谷正雄氏の優れた研究がある。^{注1}氏はその中で『舍利弗悔過經』の部分的な抄訳を行い、他經との関係や成立時期について詳細な研究を發表されている。しかし、現時点では静谷氏の抄訳を除き、訓読や現代語訳は發表されていない。そこで筆者は、本稿で『舍利弗悔過經』の試訳を行い、『三曼陀跋陀羅菩薩經』や〈普賢行願讃〉研究への掛け橋としたい。

A. 研究姿勢

和訳と語註を中心とする。『舍利弗悔過經』には漢訳しか現存せず、『大正藏』(T. 24, pp. 1090–1091)を定本とし原文をつけた。その原文は、諸版校合によるテキスト作成を意図したものではなく、筆者の読解を示すものにすぎない。よって、そこでは新たに句読点を打ち直し、括弧記号等を挿入した。原文中の句読点は、①、(文中の切れ目) ②、(並列表現) ③、(文の終わり)の意味で用いる。原文中の括弧記号は、① “～” ② ‘～’ ③ “～” の順序で挿入する。そして、それに対応する和訳では、① 「～」 ② 『～』 ③ 【～】とした。また、原文中の固有名詞には点線を引いた。原文は内容から分け、通し番号をつけ『大正藏』の対応箇所を示した。和訳の際には現代語訳を行い、『大正藏』で理解困難な場合は、『高麗藏』『宋磧砂藏』を見直し、『房山石經』をも

注1 静谷正雄『初期大乘仏教の成立過程』百華苑 1974年 pp. 118–147
静谷氏は、自ら大乘と名乗らない最初期の大乗經典「原始大乘」の範疇に、『舍利弗悔過經』を入れておられる。

参照した。しかし『舍利弗悔過經』に関しては、どの諸版も大きく変わる所がなく、理解困難な箇所はそのまま残った。その際、他經の諸例を語註で示し、それを元に和訳を試みた。使用する諸經に現代語訳があれば、その訳をお借りし、その出所を記載した。『舍利弗悔過經』には異訳として、『大乘三聚懺悔經』『菩薩藏經』およびそのチベット訳が存在する。しかしそれら諸經は『舍利弗悔過經』より後代のものであり、筆者は『舍利弗悔過經』の翻訳時期とほぼ同時代の諸經を優先した。その中で、『舍利弗悔過經』と密接な関係のある『三曼陀跋陀羅菩薩經』を特に参照した。また、語註では『漢語大詞典』（漢語大詞典出版社1992年 中国上海 以下HD.）を使用し、經中の意味がどの時代の文献に登場するかを確認した。『舍利弗悔過經』は古訳であり、筆者の力量では和訳に不安の残る箇所が多くある。諸賢の御指導を賜りたい。

B. 翻訳時期について

『舍利弗悔過經』は、『出三藏記集』（A. D. 502—515）などの古經錄では竺法護訳、『大唐内典錄』（A. D. 664）など七世紀前後の經錄では安世高訳となっている。これに関して、音写語や文体の面から竺法護^{註2}訳と論証することは困難である。一方、音写語の面から親近性のある訳者は支婁迦讖であるが、それを支持する經錄は存在しない。また内容の面からは、この經には六波羅蜜を筆頭に大乘思想が説かれ、小乘經典の翻訳に従事した安世高は訳者として除外されるだろう。このように、筆者は經錄の支持する訳者に多少の疑問をもっている。訳者を検討し直す作業は非常に困難であるが、語彙語法の面からは、翻訳時期に関する若干の指摘が行える。語彙については、仏典以前の語彙を多数踏襲しており、鳩摩羅什以前の古訳であることはほぼ間違いない。語法の面からは以下の指摘が行える。

- ①「当」で疑問文を強調する。cf. 註(1)
- ②「令」で願望を示す。cf. 註(19)

註2 齊藤隆信「『淨度三昧經』と竺法護訳經典」『佛教大学総合研究所紀要』第4号 1997年 p. 53上段
齊藤氏は、竺法護の文体は概ね四字を基本とする点を指摘されている。

- ③「至」が「乃至 (Skt. yāvat)」の意味で使用される。cf. 註(28)
 ④「所可」が「所」の意味で使用される。cf. 註(36)
 ⑤「持」「持用」が「by means of」の意味で使用される。cf. 註(46)

これらの語法は、仏典では古訳に見られる。

以上、経録や語彙語法の面から私見を述べたが、『舍利弗悔過經』は非常に小部な經典であり、訳者を検討し直すには情報量があまりに少ない。よって、筆者は訳者についての見解は避け、『舍利弗悔過經』を二世紀後半から四世紀にかけての翻訳と理解するにとどめた。

C. 『舍利弗悔過經』の位置

『舍利弗悔過經』には注意すべき定型句がある。cf. 註(6) この定型句は四度現われ、それぞれ多少表現は異なるが、内容として「十方諸仏に昼夜各三回の礼拝を行う」といった点で共通する。経中では「①懺悔②隨喜③勸請④福德の布施」といった各項目の前で、この定型句が説かれ、それは内容の切れ目としての意味も有している。これら四つの項目中、最後の「④福德の布施」では「廻向」という語は使用されないものの、思想としては「廻向」が説かれる。cf. 註(33) つまり『舍利弗悔過經』は、三品（懺悔・隨喜・勸請）に「廻向」が加わり、四品への発展経緯を示す經典と理解できる。ここで注意すべき点は、これら四品が在家信者によって説かれる点である。この經典は在家信者の独白部分（通し番号C, F, G, J）がもととなり、その前後に仏や舍利弗を配して經典の体裁を作り上げた感さえある。またその際の名残としてか、通し番号EからFへの展開の仕方や、突飛な經典の終わり方^{注3}や、経名は『舍利弗悔過經』とあるが、舍利弗は懺悔を行わない点など、經典としての未整備さが目につく。また、經典中で「音写語一語釈」を列挙する点など、翻訳段階での付加を伺わせる点も指摘できる。cf. 註(42) しかし、これらは筆者の推測にすぎず、また経

注3 通し番号K.を参照。『舍利弗悔過經』は、最終的に經典の記憶と読誦を奨励した後、經典としての体裁を伴わず唐突に終わる。推測ではあるが、『舍利弗悔過經』は記憶や読誦に程よい分量であり、読誦經典としての性格を有しているのではないか。また、説かれる内容（懺悔・隨喜・勸請・廻向）からして、この經典の目的は、仏教徒の身近な倫理項目を示す点にある。

典の整備次第を確かめる手段もないが、在家信者の独白部分がこの經典の主要部分であることは確かである。さらにこの独白部分は、現存する諸經中、まとまった三品（四品）儀礼を説く最初期の記述の一つである。^{注4}他の古訳には名称として「三品」が現われるが、『舍利弗悔過經』ほどまとまった説明は現われない。

以上のように「舍利弗悔過經」は、大乘特有の三品（四品）儀礼を理解する際、現時点ではまず参照すべき經典である。

D. 『舍利弗悔過經』の成立時期

- ① 『舍利弗悔過經』に説かれる修行階位は、四向四果に辟支佛を付けたものである。^{注5}これは「不退転」が説かれないという点で、『阿弥陀三耶三仏薩樓仏檀過度人道經』（以下『大阿弥陀經』）や『道行般若經』の修行階位より未発達なものである。^{注6}
- ② この經の成立時期を論じた代表的な研究者として、静谷正雄氏がおられる。^{注7}静谷氏は関連諸經との思想比較によって、『舍利弗悔過經』は〈小品般若經〉以前の成立とされる。しかし、筆者は、静谷氏の『舍利弗悔過經』成立時期をめぐる一姿勢（『舍利弗悔過經』には「廻向」の思想は現われない^{注8}）には、賛成できない。ここで詳細は論じないが、『舍利弗悔過經』と〈小品般若經〉の「廻向」には、少なからず類似点が見られる。筆者は稿を改め、この点について指摘したく考えている。
- ③ 『三曼陀跋陀羅菩薩經』と『舍利弗悔過經』は密接な関係にある。『三曼陀跋陀羅菩薩經』は『舍利弗悔過經』の枠組みを踏襲しつつ、阿弥陀仏や普賢菩薩行や法身を説く。それに対し『舍利弗悔過經』では、一切それらが説かれない。

注4 『舍利弗悔過經』より思想的に発展した『三曼陀跋陀羅菩薩經』（T. 14, pp. 666-668）にも、在家信者の独白による三品（四品）の説明がある。

注5 通し番号D.を参照。『舍利弗悔過經』には、六波羅蜜を筆頭に大乘思想が説かれるが、必ずしも大乘經典と切り切れない面がある。ここがその顕著な例で、少乗の修行階位が尊重され、目標にさえなっている。

注6 香川孝雄『浄土教の成立史的研究』山喜房佛書林 1993年 pp. 197-207

注7 静谷前掲書 pp. 122-133

注8 静谷前掲書 p. 130

- ④「C.『舍利弗悔過經』の位置」で述べたように、經典としての未整備が目立つ。
- ⑤「三品（四品）」「廻向」という言葉を使用せず、「三品（四品）」「廻向」の内容が説かれる。つまり『舍利弗悔過經』は、「三品（四品）」「廻向」が名称化される以前の状態を保存している。

これらのことを踏まえると『舍利弗悔過經』は、大乘經典の中ではきわめて古層に属する。しかし『舍利弗悔過經』は非常に小部な經典であり、漢訳しか現存しないことを考慮すると、判断材料が乏しく、筆者には明確な成立時期を論じることができない。

E. その他

参考文献や引用文献は註の中で示した。

仏説舍利弗悔過經

後漢安息国三藏安世高訳

A (T. 24, p. 1090. a, 6-10)

仏在羅閱祇耆闍崛山中時、与千二百五十比丘、菩薩千人共坐。第一弟子舍利弗起前、長跪叉手、問仏言：“若有善男子、善女人意欲求仏道。若前世為惡。当何用悔之乎？”。

仏言：“善哉善哉。舍利弗。憂念諸天、人民好乃如是”。

仏は羅閱祇の耆闍崛山に、千二百五十人の出家者や千人の菩薩と共に坐っていた。上座にいる弟子の舍利弗は、立って進んで、ひざまづき、合掌して仏に尋ねた。

「^{こころ}意に仏道を求めている良家の子息や良家の子女がいたとします。前世に罪を犯していたとします。一体(1)どのように罪を懺悔(2)するのでしょうか？」

仏が答えた。

「大変よろしい。舍利弗よ、そのように神々や人々を気づかうとは、何と立派なことか」

B (T. 24, p. 1090. a, 11-15)

仏言：「若有善男子、善女人欲求阿羅漢道者，欲求辟支仏道者，欲求仏道者，欲知去來之事者。常以平旦、日中、日入、人定、夜半、鷄鳴時，澡漱，整衣服，叉手，礼拝十方。自在所向，当悔過言：

仏は言った。

「阿羅漢道-(3)や、辟支仏道-(3)や、仏道-(3)を求め、過去や未来の出来事を理解したい良家の子息や良家の子女がいたとします。常ひごろ、夜明け、昼、日没、宵の口-(4)、夜中、早朝の〔各〕時間に、体や口を清め-(5)衣服を正して、合掌し、十方に礼拝します-(6)。どちらに向かっても-(7)〔次のように〕懺悔すべきです。

C (T. 24, p. 1090. a, 15-b, 17)

‘某等宿命從無數劫以來所犯過惡。至今世所犯姪姪，所犯瞋怒，所犯愚痴。不知仏時，不知法時，不知比丘僧時，不知善惡時，若身有犯過，若口犯過，若心犯過，若意犯過。若意欲害仏，嫉惡經道，若鬪比丘僧，若殺阿羅漢，若自殺父母。若犯身三、口四、意三。自殺生，教人殺生，見人殺生代其喜。身自行盜，教人行盜，見人行盜代其喜。身自欺人，教人欺人，見人欺人代其喜。身自兩舌，教人兩舌，見人兩舌代其喜。身自罵詈，教人罵詈，見人罵詈代其喜。身自妄言，教人妄言，見人妄言代其喜。身自嫉妬，教人嫉妬，見人嫉妬代其喜。身自貪飡，教人貪飡，見人貪飡代其喜。身自不信，教人不信，見人不信代其喜。身不信作善得善，作惡得惡，見人作惡代其喜。身自盜仏寺中神物，若比丘僧財物，教人行盜，見人行盜代其喜。身自輕稱、小斛、短尺欺人，以重稱、大斛、長尺侵人，見人侵人代其喜。身自故賊，教人故賊，見人故賊代其喜。身自惡逆，教人惡逆，見人惡逆代其喜。身諸所更以來，生五處者。在泥犁中時，在禽獸中時，在薜荔中時，在人中時，身在此五道中生時，所犯過惡。不孝父母。不孝於師。不敬於善友。不敬於善沙門道人。不敬長老。輕易父母。輕易於師父。輕易求阿羅漢道

者。輕易求辟支仏道者。若誹謗嫉妬之。見仏道、言非。見惡道、言是。見正言、不正。見不正、言正。某等諸所作過惡。願從十方諸仏、求哀、悔過。“令某等今世不犯此過殃。令某等後世亦不被此過殃”。“所以從十方諸仏求哀者何？”。

仏能洞視、徹聽。不敢於仏前欺。某等有過惡、不敢覆藏。從今以後皆不敢復犯”。

『私達は、過去世に、[つまり] 数え切れない劫よりこのかた、犯した罪があります。今世にいたっては、愛欲を犯し、怒りを犯し、無知を犯しています。仏を知らなかった時、[仏の] 教えを知らなかった時、出家者のサンガを知らなかった時、善や悪を知らなかった時に、あるいは身体で罪を犯し、あるいは口で罪を犯し、あるいは心で罪を犯し、あるいは^{こころ}意で罪を犯しました。あるいは^{こころ}意で仏を傷つけ、[仏の] 教え-(8)を妬み憎しみ、あるいは出家者のサンガを乱し、あるいは阿羅漢[という聖者]を殺し、あるいは自ら父母を殺しました。あるいは身体で三つ、口で四つ、^{こころ}意で三つ[の十悪を]犯しました。自ら殺生し、人に殺生させ、人が殺生するのを見て、我がことのように喜びました。自ら-(9)盗みを行い、人に盗みを行わせ、人が盗みを行うのを見て、我がことのように喜びました。自ら人を欺き、人に人を欺かせ、人が人を欺くのを見て、我がことのように喜びました。自ら二枚舌で、人を二枚舌にさせ、人が二枚舌であるのを見て、我がことのように喜びました。自ら罵り、人に罵らせ、人が罵るのを見て、我がことのように喜びました。自ら嘘をつき、人に嘘をつかせ、人が嘘をつくのを見て、我がことのように喜びました。自ら妬み、人に妬ませ、人が妬むのを見て、我がことのように喜びました。自ら強欲であり、人を強欲に-(10)させ、人が強欲であるのを見て、我がことのように喜びました。自ら[仏の教えを]信じず、人に[仏の教えを]信じさせず、人が[仏の教えを]信じないのを見て、我がことのように喜びました。自ら善[因]を作れば楽[果]に至ることや、悪[因]を作れば苦[果]に至ることを信じず、人が悪[因]を作るのを見て、我がことのように喜びました。自ら仏塔-(11)の中の神聖なもの-(12)や、あるいは出家者のサンガに属する財物を盗み、人に盗みを行わせ、人が盗みを行うのを見て、我がことのように喜びました。自ら軽い秤や、小さな升や、短いものさしで人を欺き、重い秤や、大きな升や、長いもの

さして人を騙し、人が人を騙すのを見て、我がことのように喜びました。—(13) 自ら故意に—(14)賊となり、人に故意に賊とならせ、人が故意に賊となるのを見て、我がことのように喜びました。自ら憎み逆らい、人に憎み逆らわせ、人が憎み逆らうのを見て、我がことのように喜びました。—(15)。この身が生じて—(16)以来、五道—(17)に生まれてきました。地獄にいた時や、動物[の世界]にいた時や、飢えた者[の世界]にいた時や、人[の世界]にいた時、[つまり私達が]この五道の中に生まれた時に、犯した罪[があります]。父母に孝行しませんでした。師に孝行しませんでした。良き指導者を尊敬しませんでした。優れた修行者を尊敬しませんでした。高德の出家者を尊敬しませんでした。父母を軽んじました。師匠を軽んじました。阿羅漢道を求める者を軽んじました。辟支仏道を求める者を軽んじました。あるいは、彼らをそしったり、妬んだりしました。仏道を見て、正しい道ではないと言いました。誤った道を見て、正しい道と言いました。正しいものを見て、正しくないと言いました。正しくないものを見て、正しいと言いました。私達は多くの罪を犯しました。十方の諸仏に—(18)願い、哀れみを求め、懺悔します。【どうかこの世で、私達がこれらの罪を犯しませんように—(19)。どうか次の世で、私達がこれらの害を受けませんように】【なぜ十方の諸仏に哀れみを求めるのか?】[たとえば]仏は見通すこと—(20)や、聞き知ること—(20)ができるからです。仏の前では、正直にならざるをえません。私達は決して犯した罪を隠しごと—(21)しません。今後再び、決して[罪を]犯しません』と」

D (T. 24, p. 1090. b, 17—29)

仏語舍利弗：“若有善男子、善女人，意不欲入泥犁、禽獸、薜荔中者，諸所作過皆當悔過之，不當覆藏。受戒以後，不當復作惡。不欲生迦地、無仏處、無經處、無比丘僧處、無義理處、善惡處者，皆當悔過，不當覆藏。意不欲愚痴、聾、盲、瘡癰，不欲生屠，生漁獵、獄吏，更生貧家，皆當悔過，不當覆藏。女人欲求男子者，皆當悔過。欲得須陀洹道不復入泥犁、薜荔中者，皆當悔過。欲得斯陀含道上天作人，欲得阿那含道上二十四天，欲得阿羅漢泥洹去者，欲於世間得阿羅漢道者，欲得辟支仏道者，欲知去來之事者，皆當悔過，不當覆藏”。

仏は舍利弗に言った。

「良家の子息や良家の子女がいたとして、地獄や、動物〔の世界〕や、飢えた者〔の世界〕—(22)に赴くことを意に望まない者は、作った罪すべてを懺悔して、隠しごととしてはいけません。戒を受け、その後再び罪を作ってはいけません。辺地や、仏のいない場所や、〔仏の〕教え—(23)のない場所や、出家者のサンガのない場所や、道理のない場所や、善も悪もある場所に生まれたくない者は、すべてを懺悔して、隠しごととしてはいけません。愚かさや、聴覚障害や、視覚障害や、発音障害を意に望まない者、屠殺人や、獵師や、看守に生まれたり、貧しい家に生まれ変わる—(24)を望まない者は、すべてを懺悔して、隠しごととしてはいけません。男性になることを望む女性は、すべてを懺悔すべきです。須陀洹〔という聖者〕の境地—(25)に達して、もはや地獄や飢えた者〔の世界〕に赴きたくない者は、すべてを懺悔すべきです。斯陀含〔という聖者〕の境地—(25)に達して、天に上り人となることを望む者や、阿那含〔という聖者〕の境地—(25)に達して、二十四天—(26)に上ることを望む者や、阿羅漢〔という聖者〕となって涅槃に入ることを望む者や、この世で阿羅漢〔という聖者〕の境地—(25)に達することを望む者や、辟支仏〔という聖者〕の境地—(25)に達することを望む者や、過去や未来の出来事を理解したい者は、すべてを懺悔して、隠しごととしてはいけません」

E (T. 24, p. 1090. c, 1-7)

仏語舍利弗：“若善男子、善女人、各当日三稽首為十方現在諸仏作礼。十方諸仏皆以中正遍教天下人、日月所照人民、使作善。仏以經道雨於天下。譬如天雨百穀、草木皆茂好、仏以經道雨於天下、故生侯王、四天王、上至三十三天上豪貴富樂。仏生須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢者。

仏は舍利弗に言った。

「良家の子息や良家の子女がいたとして、日に三度、頭を地につけ、十方の現在諸仏に礼拝すべきです。十方の諸仏誰もが、かたよりなく世の人、〔つまり〕太陽や月が照らす人々に教えを巡らし—(27)、善を行わせます。仏は教えの雨を世に降らします。例えば天があらゆる穀物や草木に雨を降らし、すべてが

茂るように、仏は教えの雨を世に降らし、諸侯や諸王や四天王、はては一(28)三十三天の上で勢力があり、安らかさ一(29)をもった〔神々を〕生み出します。仏は須陀洹〔という聖者〕や、斯陀含〔という聖者〕や、阿那含〔という聖者〕や、阿羅漢〔という聖者〕を生み出します。

F (T. 24, p. 1090. c, 7—p. 1091. a, 3)

‘願十方諸仏聴某等所言。天下人民、蜎飛蠕動之類所作好惡。若布施者、若持道勤力不毀經戒者、若慈心念人民者、若作善無量者、若施於菩薩及諸比丘僧者、若施凡夫及貧窮者、下至禽獸慈哀者。某等勸其作善、助其歡喜。諸過去仏所可過度人民得泥洹者、某等皆助其歡喜。諸当来仏教人作善遠離五惡、生死之道、至令得阿羅漢、辟支仏道者。某等皆助。某等勸樂、使作善、令如仏。今十方現在諸仏所当過度者、教人布施不犯經戒。慈哀人民、蜎飛蠕動之類者、皆令脱於泥犁、禽獸、薜荔、愚痴、貧窮、至令得須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支仏泥洹道。某等皆勸樂、使作善、助其歡喜。諸過去菩薩未成仏者奉行“六波羅蜜、”所作善。行“檀波羅蜜、”布施、行“尸波羅蜜、”不犯道禁、行“羼提波羅蜜、”忍辱、行“精進波羅蜜、”精進、行“禪波羅蜜、”一心、行“般若波羅蜜、”智慧、成六波羅蜜。諸過去若菩薩奉行六波羅蜜。某等勸樂、助其歡喜。諸当来菩薩奉行六波羅蜜者、某等勸樂、助其歡喜。今現在菩薩奉行六波羅蜜者、某等勸樂、助其歡喜。某等諸所得福、皆布施天下十方人民、父母、蜎飛蠕動之類、兩足之類、四足之類、多足之類。皆令得仏福得辟支人。持四大城金、銀、宝物、持用布施、百倍、千倍、万倍、億倍’”。

『十方の諸仏よ、どうか私達の話聞いてください。世の人々や、飛び跳ねうごめく虫類一(30)の行為には、良いことも悪いこともあります。布施する者もいますし、あるいは、〔仏〕道を保って励み一(31)、教えに基づく戒一(32)を破らない者もいますし、あるいは、慈しみの心で人々のことを心に念じる者もいますし、あるいは、量りしれない善を作る者もいますし、あるいは、菩薩や出家者のサンガに施す一(33)者もいますし、普通の者や貧しい者、あるいは、下は動物にまで施しをして慈しむ者がいます。私達は彼らに善を作るよう鼓舞して一(34)、〔善を作った彼らの喜びを〕我がことのように喜びます一(35)。過去仏達が

救済した一(36/37)人々が涅槃を得れば、私達は〔彼らの喜びを〕我がことのように喜びます。未来仏達は人々に善を作らせ、五悪や輪廻の境地一(38)を離れさせたり、はては阿羅漢〔という聖者〕や辟支仏〔という聖者〕の境地に至らせるでしょう。私達は〔彼らの喜びを〕すべて〔我がことのように喜びます〕。一(39)私達は〔彼らを〕鼓舞して、善を作らせ、仏のようにさせます一(40)。今、十方の現在諸仏は常に一(41)〔人々を〕救済しており、人に布施をさせ、教えに基づく戒を犯させません。人々や飛び跳ねうごめく虫類を慈しみ、彼らすべてを、地獄や、動物〔の世界〕や、飢えた者〔の世界〕や、愚かさや、貧しさから解放させ、はては須陀洹〔という聖者〕や、斯陀含〔という聖者〕や、阿那含〔という聖者〕や、阿羅漢〔という聖者〕や、涅槃の境地に到らせています。私達は〔彼ら〕すべてを鼓舞して、善を作らせ、〔善を作った彼らの喜びを〕我がことのように喜びます。過去の菩薩達でまだ仏となっていなかった者が、

【六波羅蜜】つまり【なすべき善】を大事に実践しました。〔彼らは〕【檀波羅蜜】つまり【布施】を行い、【尸波羅蜜】つまり【持戒一(42)】を行い、【瞿提波羅蜜】つまり【忍耐】を行い、【精進波羅蜜一(42)】つまり【精進】を行い、【禪波羅蜜】つまり【精神統一】を行い、【般若波羅蜜】つまり【智慧】を行じて、六波羅蜜を完成しました。過去の菩薩達一(43)は六波羅蜜を大切に実践しました。私達は〔彼らを〕鼓舞して、〔彼らの喜びを〕我がことのように喜びました。六波羅蜜を大切に実践する未来の菩薩達がいるならば、私達は〔彼らを〕鼓舞して、〔彼らの喜びを〕我がことのように喜ぶでしょう。今、六波羅蜜を大切に実践する現在の菩薩達がいるならば、私達は〔彼らを〕鼓舞して、〔彼らの喜びを〕我がことのように喜びます。私達が得た多くの福德を、すべて世の十方の人々や、父母や、飛び跳ねうごめく虫類や、二本足の類や、四本足の類や、多足の類に布施します。彼らすべてに仏の福德を得させ、辟支人一(44)とさせます。〔私達の布施は〕四大洲一(45)の金や銀や宝物で一(46)布施することより、百倍も千倍も万倍も億倍も〔優れています〕』と」

G (T. 24, p. 1091. a, 3-14)

仏語舍利弗：“若善男子、善女人。当昼夜各当三過稽首為十方仏拝言：‘願聴

某等所言。十方仏已得仏、不説經。今某等勸勉、使爲諸天、人民、蜎飛蠕動之類説經、使脱於泥犁、禽獸、薜荔、愚痴、貧窮、至令得泥洹道。諸十方欲般泥洹者、某等願從求哀。『且莫般泥洹。当令諸天、人民、蜎飛蠕動之類得其福。皆令得脱於泥犁、薜荔、』。仏語舍利弗：『某等宿命爲菩薩時、某等当勸樂諸仏説經。『且莫般泥洹』。用是故某等爲仏。第一四天王、第二天王釈来下、叉手、作礼、求哀。『守我諸天、人民、説經』。無數諸天曉我。『且莫般泥洹』。

仏は舍利弗に言った。

「良家の子息や良家の子女がいたとします。昼と夜にそれぞれ三度—(47)、頭を地につけ、十方の仏に礼拝して[次のように]言うべきです。

『どうか私達の話聞いてください。十方の仏はすでに悟り—(48)を得ているのに、教えを説いてくれません。今、私達は[十方の仏に] 神々や、人々や、飛び跳ねうごめく虫類のために教えを説かせ、[彼らを] 地獄や、動物[の世界]や、飢えた者[の世界]や、愚かさや、貧しさから解放し、はては涅槃の境地を獲得させるよう鼓舞します。私達は、涅槃に入ろうとしている十方の方々にお願いして、哀れみを求めます。【どうか、しばらく涅槃に入らないでください。神々や、人々や、飛び跳ねうごめく虫類にその福德を獲得させてください。[彼らを] 地獄や、飢えた者[の世界] から逃れさせてください。』と」

仏は舍利弗に言った。

「自分達が過去世で菩薩だった時、自分達も、常に諸仏に教えを説くよう鼓舞しました。

『どうか、しばらく涅槃に入らないでください』と。このような理由で、自分達は仏となりました。[下から数えて] 一番目の四天王や、二番目の帝釈天が降下し、[神々は] 合掌して、礼拝して、哀れみを求めました。『我々神々や人々を守り、教えを説いてください』と。無数の神々が私に告げました—(49)。

『どうか、しばらく涅槃に入らないでください』と」

H (T. 24, p. 1091. a, 14—16)

仏語舍利弗言：「如是人民種種、各得其類。作善自得其福、作惡自得其殃」。

仏は舍利弗に言った。

「この様に人々は様々であって、それぞれ自分に相当する〔果報〕を得ます。善を行えば自ずから福德を得て、悪を行えば自ずから災いを受けます」

I (T. 24, p. 1091. a, 16–18)

舍利弗白仏言：“若有善男子、善女人欲求仏道者。当何以願為一(50)得之？”

舍利弗は仏に言った。

「仏道を求めている良家の子息や良家の子女がいたとします。仏道を獲得するには、一体どのように願ってこれを成就するのですか？」

J (T. 24, p. 1091. a, 18–b, 2)

仏言：“若有善男子、善女人当昼夜各三稽首，為十方仏拝言：‘願十方諸仏聴。某等宿命從無數劫以來，所做得福。若布施，若持經道，若持善意，為仏作善，為經作善，為比丘僧作善，為凡人作善，若為禽獸作善。作惡自得其殃，作善自得其福。為惡自悔，持經戒，不毀。若受戒，不与女人通。若勸樂諸仏菩薩万民作善。若勸勉諸仏“且莫般泥洹”。某等取諸学道以來，所得福德，皆集聚合会，以持好心，施与天下十方人民、父母、蜎飛蠕動之類。皆令得其福。有余少所，令某得之。令某等作仏道行仏經。諸未度者，某当度之。諸未脱者，某等当脱之。諸未得泥洹者，某等当令得泥洹’”。

仏は答えた。

「良家の子息や良家の子女は、昼と夜にそれぞれ三度、頭を地につけ、十方の仏を礼拝して〔次のように〕言うべきです。

『十方の諸仏よ、どうか聞いてください。私達は、過去世に、〔つまり〕数え切れない劫よりこのかた、福德を得てきました。布施しました。あるいは、教えを保ちました。あるいは、正しい心を保ちました。あるいは、仏に対して善を行いました。〔仏の〕教えに対して善を行いました。あるいは、出家者のサンガに対して善を行いました。あるいは、普通の者に対して善を行いました。あるいは、動物に対して善を行いました。悪を行い自ずから災いを受けたり、善を行い自ずから福德を得ました。悪を行い自ずから懺悔したり、教えに基づ

く戒を保ち破りませんでした。あるいは、戒を受け女性と交わりませんでした。あるいは、すべての人に善を作るよう、仏・菩薩達を鼓舞しました。あるいは、仏達に【どうか、しばらく涅槃に入らないでください】と鼓舞しました。私達は仏道-⁽⁵¹⁾を取り行い-⁽⁵²⁾このかた得た福德を、すべて集め合わし-⁽⁵³⁾、良い心-⁽⁵⁴⁾をもって、世の十方の人々や、父母や、飛び跳ねうごめく虫類に施します。すべての者に、その福德を得させます。[福德が] 少しばかり-⁽⁵⁵⁾あまれば、福德を自分自身のものとします。私達は仏道を行い、仏の教えを実行できますように。救済されていない者達を、私はきっと救済します。[輪廻から] 逃れていない者達を、私達はきっと解放します。私達は涅槃を得ていない者達に、きっと涅槃を得させます-⁽⁵⁶⁾』と」

K (T. 24, p. 1091. b, 3-11)

仏語舍利弗言：“使天下男子、女人皆為得阿羅漢、辟支仏、若有人供養天下阿羅漢、辟支仏千歳。其福寧多不？”。舍利弗言：“但供養一阿羅漢、辟支仏一日，其福無量。何況拳天下阿羅漢、辟支仏、千歳乎”。仏言：“其供養天下阿羅漢、辟支仏千歳，不如持‘悔過經’ 昼夜各三過誦一日。其得福勝供養天下阿羅漢、辟支仏百倍、千倍、万倍、億倍”。

仏説舍利弗悔過經

仏は舍利弗に言った。

「世の男性や女性誰もが阿羅漢 [という聖者] や、辟支仏 [という聖者] になったとして、人が世の阿羅漢 [という聖者] や、辟支仏 [という聖者] を千年供養したとします。その福德は多いでしょうか？-⁽⁵⁷⁾」

舍利弗が答えた。

「一人の阿羅漢 [という聖者] や、辟支仏 [という聖者] を一日供養するだけでも、その福德は量りしれません。まして、世の阿羅漢 [という聖者] や、辟支仏 [という聖者] を [供養する] 千年は、言うまでもありません」

仏は言った。

「世の阿羅漢 [という聖者] や、辟支仏 [という聖者] を供養する千年は、『舍利弗 悔過經』を記憶して-⁽⁵⁸⁾、昼と夜それぞれ三度読む一日には及び

ません。その福德は、世の阿羅漢 [という聖者] や、辟支仏 [という聖者] を供養することより、百倍も千倍も万倍も億倍も優れています」

仏説舍利弗悔過經

『舍利弗悔過經』註

(1) 【当】 ○何用悔之乎？

「当」を疑問文を強める働きと理解した。この様な例として『大阿弥陀經』(T. 12, p. 301. a, 6) 「○不可得乎？」(一体到達できないだろうか?) や、『三曼陀跋陀羅菩薩經』(T. 14, p. 666. c.) 「善男子、善女人欲得無蓋清淨者、○施行何等法、自致得之乎？」(良家の子息や、良家の子女が [煩惱に] 覆われない [心の] 清らかさを望んだなら、一体どのような教えを行えば、自らそれを得ることができるのですか?) がある。『舍利弗悔過經』では、この他の例として「○何以願為得之？」(T. 24, p. 1091. a, 17-18) がある。

cf. 辛嶋静志 「『大阿弥陀經』願文訳」『教化研究』117 1997年 p. 139上段

(2) 【悔】 当何用○之乎？

『舍利弗悔過經』中での「悔」や「悔過」は同義であり、双方「懺悔」と訳す。【懺】HD. vol. 7, p. 795, b 懺悔 cf. 『華嚴經』「普賢行願品」, 『晋書』「仏図澄伝」(A.D. 645 ca.)

平川彰氏は、上述の『晋書』や『集韻』(宋代に編集された音韻書) などをもとに「懺悔」の「懺」には元来「悔いる」という意味があり、音写語ではないと論じておられる。氏がそう説かれる根拠は大きく二点にまとめられる。(cf. 平川彰著作集第7巻『浄土思想と大乘戒』春秋社 1990年 pp. 431-453)

一点目として氏は、 $\sqrt{kṣam}$ のcaus.に「許しを求める」という意味がある-(2-1)ものの、道宣(A.D. 596-667)以来「懺」の原語として問題にされてきたSkt. kṣamaは「忍ぶこと」が基本の意味であり、「懺悔」の基本的意味「罪の告白」が、Skt. kṣamaでは生じないと述べられる。この主張は、義浄(A.D. 635-713)の解釈をより詳細に再解釈されたものである。二点目は、「懺悔」の原語を諸本の比較によって、確認された結論である。初めに氏は「懺悔」が、『鼻奈邪』『十誦律』『四分律』『摩訶僧祇律』『五分律』(すべてA.D. 400前後の訳出)などの律藏に頻出することを指摘されている。そしてパーリ律との比較から、そこに現われる「懺悔」の原語をSkt. āpattidesanāと推定された。次に氏は、梵本と梵本対応漢訳の存在する仏典に着目され、「懺悔」に対応する原語をSkt. pratidesanā, pāpadesanā, deśanā, etc. と結論づけられる。

氏はこうした点から、「懺悔」はSkt. kṣamaに関係する音写語ではないと主張される。しかし、二点目については、例外があるように筆者には思える。氏が調査

された仏典は「梵本と梵本対応漢訳」という性格上、漢訳仏典の区分で言えば古訳以降の後代の諸資料である。それに対し我々が現在手にできる最初期の資料の一つ、古訳にはSkt.√kṣamに類する表現によって「懺悔」を推測させる箇所がある。「推測」という表現を用いるのは、古訳という性質上、それに対応する梵本や翻訳仏典が現在のところ発見されていないからである。以下、試みにその箇所を提示する。

聶道真訳－(2-2)『三曼陀跋陀羅菩薩經』(T. 14, p. 666. c.)

文殊師利菩薩問三曼陀跋陀羅菩薩言：“若有人求菩薩道者。善男子、善女人欲得無蓋清淨者，當施行何等法，自致得之乎？”三曼陀跋陀羅菩薩報文殊師利菩薩：““若有善男子、善女人欲求菩薩道者，當整衣服，晝夜各三稽首十方諸仏作礼，悔過，悔諸所作惡，諸所當忍者忍之，諸所當礼者礼之，諸所當願樂者願樂之，諸所當勸請者勸請之。～””。

(文殊師利菩薩が三曼陀跋陀羅菩薩に尋ねた。「菩薩道を求める人がいたとします。[その] 良家の子息や、良家の子女が[煩惱に] 覆われない [心の] 清らかさを望んだなら、一体どの様な教えを行えば、自らそれを得ることができるのですか?」

三曼陀跋陀羅菩薩は文殊師利菩薩に答えた。「良家の子息や、良家の子女が菩薩道を求めるなら、衣服を整え日中に三度、夜中に三度、十方の仏 [の足] に頭をつけて礼拝し、過ちを懺悔し、犯した諸惡を懺悔し、忍ぶべき事は忍び、礼拝すべき者には礼拝し、願うべき事は願い、勸請すべき事は勸請すべきです。～」)

『三曼陀跋陀羅菩薩經』は普賢菩薩と文殊菩薩を中心に、三品(四品)儀礼が説かれる經典である。上に掲げた箇所は經典冒頭部分にあたり、この後「悔過品」「願樂品」「請勸品」など各章に懺悔や隨喜や勸請を配分し、全体として三品(四品)儀礼が説かれる。上の波線部分は、それら各章の話題を一括して語る表現であり、従って同一表現で列挙されている。ここで筆者が問題とするのは、それら同一表現中の「諸所當忍者忍之」である。「忍」は三品(懺悔・隨喜・勸請)や、それをより發展させた四品(三品+廻向)や五品(四品+發願)から外れたものである。また『三曼陀跋陀羅菩薩經』中には、話題を一括する際にのみ「忍」が挙げられ、他の部分に「忍」に関する説明はない。それでは一体「諸所當忍者忍之」をどう理解すべきか。結論として、筆者はこれを「懺悔」の一表現と理解したい。波線部分は三品(四品)儀礼關係項目の同一表現であるが、そこには三品(四品)儀礼に必須の「懺悔」の意味が見当たらない。そこで筆者は、先にSkt. kṣamaは「忍ぶこと」が基本の意味と確認したが、『三曼陀跋陀羅菩薩經』訳者はSkt.√kṣamに類する表現を「懺悔」の意味と理解せず、「忍」と訳し間違えたと推測する。つまり、「懺悔」の意味が現われるべき箇所に、「忍」が現われていることによって、原語がSkt.√kṣamに類する表現と推測できるのである。－(2-3)

先に述べた平川氏の指摘によると、梵本と梵本対応漢訳の存在する仏典からは、

「懺悔」に相当する原語にSkt. *kṣama*は見当たらない。ところが、古訳からは「懺悔」に相当する原語の一つとして、Skt. $\sqrt{kṣam}$ に類する表現が推測できる。

(2-1) Skt. $\sqrt{kṣam}$ は「忍ぶ」という意味が基本であるが、そこから「許しを求める」という意味の派生経緯は以下のように説明されうる。Monier Williams, *A SANSKRIT-ENGLISH DICTIONARY*, p. 326, b には、*Mahābhārata*, *Bhagavadgītā*などを出典として $\sqrt{kṣam}$ のcaus.の意味を「to ask anyone (acc.) pardon for anything (acc.)」としている。つまり、人に忍ばせることは、その人にとっては許すこととなり、立場を変えれば「許しを求める」となる。

(2-2) 『三曼陀跋陀羅菩薩經』は現行の大蔵經では聶道真訳となっている。しかし、経録や音写語の面からは聶道真訳は疑わしい。確かなことは言えないが、支婁迦讖（あるいは関係者）訳に親近性がある。

cf. 香川前掲書 p. 471

cf. 拙稿「『三曼陀跋陀羅菩薩經』の研究—経録と訳語による考察—」『比較思想研究』第23号別冊 1997年 p. 31

(2-3) 仮に「懺悔」がSkt. *kṣama*に関係があるとすれば、以下の解釈も可能であろう。

HD. vol. 7, p. 795, b【懺悔】には、以下の説明がある。

「仏教語。梵文*kṣama*、音訳為「懺摩」、省略為懺、意識為悔、合称为悔“懺悔”ここでは「梵文*kṣama*、音訳為「懺摩」と記述されている。しかし「懺」は元来「摩」に相当する音を含んでおり（2-3-1）、「懺」でSkt. *kṣama*に対応する。次に*kṣ-*の音に関しては、*kṣ-*に対応する音が当時の中国語音には存在せず、*k-*が省略され*ṣ-*と発音された。このような例として、Skt. *akṣobhya*（「阿閼」）や、Skt. *kṣana*（「刹那」）や、Skt. *kṣetra*（「刹土」）がある。そうして、最終的に「悔」という意味を表す語を付け足し「懺悔」となった。この様に、音写語にさらに原語の意味を付け足す一種の語彙解釈法は、漢訳仏典に時折見られる。例えば、「禪定」（「禪」はSkt. *dhyāna*に対応する音写語）や、「刹土」（「刹」はSkt. *kṣetra*に対応する音写語）である。

(2-3-1) cf. Edwin G. Pulleyblank, *LEXICON OF RECONSTRUCTED PRONUNCIATION in Early Middle Chinese, Late Middle Chinese, and Early Mandarin*, 1991 UBC Press Vancouver p. 49

(3) 【道】若有善男子、善女人欲求阿羅漢○者、欲求辟支仏○者、欲求仏○者、欲知去来之事者。

静谷正雄氏は、ここの「阿羅漢道」「仏道」の原語をSkt. *arhad-mārga*, *buddha-mārga*と推測されている。しかしこの記述は三乗の表現である。また、原語がSkt. *yāna*に類する語であれば、「道」とも「乗」とも訳されうる。よって「道」の原語はSkt. *yāna*に類するものであろう。

cf. 静谷前掲書 p. 124

- (4)【人定】常以平旦、日中、日入、〇〇、夜半、鷄鳴時、澡漱、整衣服、叉手、礼拝十方。

HD. vol. 1, p. 1043, b 夜深人静時 cf. 『後漢書』「来歙伝」(A.D. 426 ca.)

- (5)【澡漱】常以平旦、日中、日入、人定、夜半、鷄鳴時、〇〇、整衣服、叉手、礼拝十方。

HD. vol. 6, p. 165, a 洗漱 cf. 『魏書』「西域伝」(A.D. 550 ca.)

仏典に現われる例として、仏駄跋陀羅訳『大方広仏華嚴經(六十卷)』「〇〇口齒当 願衆生 向浄法門 究竟解脱」(T. 9, p. 431. b, 4-5) (口と齒をそそぐときには、衆生が清らかな(仏の)教を修めて、ついには解脱を得るようにと願う。)がある。

cf. 木村清孝 仏教經典選5『華嚴經』筑摩書房 1986年 p. 30

【澡】HD. vol. 6, p. 164, a 沐浴 cf. 『史記』「亀策列伝」(B.C. 90 ca.)

【漱】HD. vol. 6, p. 73, a 含水洗蕩口腔 cf. 『管子』「弟子職」(B.C. 7C ca.)

- (6)【常以平旦、日中、日入、人定、夜半、鷄鳴時、澡漱整衣服、叉手、礼拝十方。自在所向、当悔過言：～】

『舍利弗悔過經』中では、儀礼冒頭に定型句がおかれる。上記の記述は「懺悔」に関する定型句である。「随喜」に関する定型句として「若善男子、善女人、各当日三稽首為十方現在諸仏作礼。」(T. 24, p. 1090. c, 1-2)、「勧請」に関する定型句として「若善男子、善女人。当昼夜各当三過稽首為十方仏拝言：～」(T. 24, p. 1091. a, 3-4)、「福德の布施」に関する定型句として「若有善男子、善女人昼夜各三稽首、為十方仏拝言：～」(T. 24, p. 1091. a, 18-19)がある。これらの共通点は、「十方諸仏に昼夜各三回の礼拝を行う」点であり、これは大乘仏教特有の儀礼である。

また、ほぼ同様の表現が諸經に見られる。例として以下の記述を挙げる。

- ・『三曼陀跋陀羅菩薩經』(T. 14, p. 666. c, 14-15) cf. 注(2)

“若有善男子、善女人欲求菩薩道者、当整衣服昼夜各三稽首十方諸仏作礼、～。”

(「良家の子息や、良家の子女が菩薩道を求めるなら、衣服を整え日中に三度、夜中に三度、十方の諸仏 [の足] に頭をつけて礼拝し、～)」

- ・安玄訳『法鏡經』(T. 12, p.18. c, 25-29)

“又復理家。居家修道者假使為離師之教誨時、世無仏、無見經者、不与聖衆相遭遇、是以当稽首十方諸仏、亦彼前世求道所行、志願之弘。‘願者其一切成就佛法之德’。以思念之、以代其喜、於是昼三亦夜三以論三品經事、一切前世所施行惡以自首誨 (v.l. 悔)、改往、修来。～”

(「また居士よ、在家の修業者が師の教を離れて、世に仏はなく、教を示す者はなく、サンガと出会わなければ、その時、十方の諸仏や、あるいは諸仏の前世の菩薩行や、誓願の素晴らしさに敬礼すべきです。『どうかすべての者が仏法の徳を完成しますように』。このように思い、我がことのように喜び(随喜)、日中に

三度、夜中に三度、三品の教えを語り、すべての前世の悪行を自らすすんで告白し、懺悔することによって、過去を改め、未来に努め励みます。～」)

- *Śikṣāsamuccaya* (BIBLIOTHECA BUDDHICA. I ed. by Cecil Bendall 名著普及会 1977 p. 290)

Āryogradatta-pariprcchāyāṃ hi tri-rātre trir divasasya ca śuceḥ 'suci-vastra-prāvṛtasya ca tri-skandhaka-pravartanam uktaṃ//
tatra trayāḥ pāpa-deśanā-puṇyānumodanā-buddhādhyeṣanākhyāḥ
puṇya-rāsitvāt/～

(*Āryogradatta-pariprcchā*には、「夜中に三度、そして日中に三度、[体を] 清め清潔な衣服を身につけた者は、三品を実践します」と説かれている。その三とは、功德の集まりのうち、罪の告白、功德の随喜、仏の勧請と呼ばれるものである。～)

なお礼拝を伴った滅罪儀式や、罪の告白による滅罪儀式は、当時のインドにおいて仏教特有の儀式ではなかった。B.C. 2 C以降の成立と考えられる『マヌ法典』に、それらを伺わせる記述が存在している。

Manusmṛti, 2-69

upaniya guruḥ śiṣyaṃ śikṣayec chaucam āditaḥ/
ācāram agni-kāryaṃ ca saṃdhyopāsanam eva ca/

(「師匠は弟子を導いて、まず初めに、清めと良い慣習と祭火の儀式とサンディヤー時(昼夜の変わりめ)の礼拝を、教えなければなりません。)

この記述はバラモンの日々の義務として説かれたものである。この「サンディヤー時の礼拝」とは、定刻にサーヴィトリ讃歌を詠唱することによる滅罪儀式と理解できる。(cf. *Manusmṛti*, 2-101, 102, 103, 104) また「サンディヤー時の礼拝」に関する詳細な研究に、永ノ尾信悟「ヒンドゥー儀礼の変容一朝の勤行を例として」がある。

Manusmṛti, 11-227

khyāpanenānutāpena tapasā 'dhyayanena ca/
pāpakṛṇ mucyate pāpāt tathā dānena cāpadi/

(「告白によって、悔改によって、苦行によって、[ヴェーダの] 詠唱によって、罪を作った者は、罪から解放されます。また具合の悪い時には財物によって[罪から解放されます]。)」

cf. *MANUSMṚTI with the Sanskrit Commentary Manvarthamuktavali OF KUL-LUKA BHATTA*, Edited by prof. J. L. SHASTRI with English Introduction by Prof. S. C. BANERJI DELHI 1983

cf. 永ノ尾信悟「ヒンドゥー儀礼の変容一朝の勤行を例として」(長野泰彦 井狩弥介編『インド＝複合文化の構造』法蔵館 1993年)

- (7)【自在】○○所向, 当悔過言:～

HD. vol. 8, p. 1311, a 自由；無拘束 cf. 『後漢紀』『光武帝紀三』(A.D. 3 C ca.)

仏典において「自在」は「随意」と同義の場合がある。例えば、仏駄跋陀羅訳『大方広華嚴經(六十巻)』『若在危難礙 当願衆生 随意自在 無所罣礙』(T. 9, p. 430. c, 15-16)がある。波線部分は「心のままに自由自在に」といった意味である。また、「自在所〜」「随意所〜」「随心所〜」で「〜なすまに」といった意味となる。そのような例として『大阿弥陀經』『恣若随意所欲好喜』(T. 12, p. 305. c, 3)、「随意所欲喜樂」(T. 12, p. 305. c, 19)、「随心所欲至到飛行」(T. 12, p. 308. b, 14)、「自在意所欲作為」(T. 12, p. 311. b, 13)などがあり、下線部分は「[心が] 欲するままに」といった意味である。なお、こういった表現中での「随」=「在」を扱った研究に、蔡鏡浩編著『魏晉南北朝詞語例釋』がある。「自在所向〜」の和訳に際しては、「向かうがままに〜」、つまり「どちらに向かっても〜」とした。

cf. 木村清孝 仏教經典選5『華嚴經』筑摩書房 1986年 p. 18

cf. 管野博史「大本經(二)注」p. 483上段(『現代語訳「阿含經典」一長阿含經』第1巻 平河出版社 1995年)

cf. 丘山新「幣宿經 注」p. 322下段(『現代語訳「阿含經典」一長阿含經』第2巻 平河出版社 1997年)

cf. 蔡鏡浩編著『魏晉南北朝詞語例釋』江蘇古籍出版社 1990年 pp. 408-409 (この書籍を紹介、拝見させて頂き、また貴重な御教示を下さった辛嶋静志氏、齊藤隆信氏に深く感謝致します。)

(8)【經道】若意欲害仏、嫉惡○○、若鬪比丘僧、若殺阿羅漢、若自殺父母。

「經道」は古訳に頻出する語彙で、「教え」を意味する。例として『大阿弥陀經』(T. 12, p. 300. c, 20-21)「王聞仏○○、心即歡喜開解、便棄國捐王、行作沙門、字曇摩迦、作菩薩道。」(王は仏の教えを聞いて、歡喜し、はっきり理解し、すぐさま国と王位を捨てて、沙門となって、曇摩迦となりの、菩薩としての修行をなした。)や、同經(T. 12, p. 316. c, 14)「我般泥洹去後、○○稍斷絶。」(私が完全な涅槃に入った後、教えはしだいに途絶えます。)がある。『舍利弗悔過經』では、他の例として「仏以○○雨於天下。」(T. 24, p. 1090. c, 3-4)、「譬如天雨百穀、草木皆茂好、仏以○○雨於天下、故生侯王、四天王、上至三十三天上豪貴富樂。」(T. 24, p. 1090. c, 3-4)、「若布施、若持○○、若持善意、為仏作善、為經作善、為比丘僧作善、為凡人作善、若為禽獸作善。」(T. 24, p. 1091. a, 20-23)がある。

cf. 辛嶋静志「『大阿弥陀經』願文訳」『教化研究』117 1997年 p. 138下段

(9)【身自】○○行盜、教人行盜、見人行盜代其喜。

HD. vol. 10, p. 701, b 親自 cf. 『史記』『吳王濞列伝』(B.C. 90 ca.)

(10)【貪飡】身自○○、教人○○、見人○○代其喜。

HD. vol. 10, p. 111, b 貪得無厭 cf. 『叙列代王臣滯惑解』(A.D. 7 C ca.)

古訳に現われる例として、以下の例がある。

- ・『三曼陀跋陀羅菩薩經』(T. 14, p. 667. a, 2-7)

“其有於一切諸仏、諸菩薩、諸迦羅蜜、諸父母、諸阿羅漢、諸辟支仏、一切諸人所可誹謗者、若恣隨欲、恣隨痴、恣隨自用、若有頑悞不與人語、若為貪姪所牽、為慳姪所牽、為○○所牽、為諛諂所牽、為七百五十諸欲所牽、其心乱時、不能自專。～”
 (「私がすべての仏や、菩薩達や、善知識達や、父母達や、阿羅漢達や、辟支仏達や、すべての人に非難されても、あるいは欲のなすまま、無知のなすまま、手前勝手に、あるいは頑固で耳をかさず、人と語らず、あるいは貪りや淫欲に引かれ、吝嗇や嫉妬に引かれ、強欲に引かれ、へつらうことに引かれ、七百五十の欲に引かれ、私の心が乱れた時、集中できませんでした。～」)

- (1) 【仏寺】身自盜○○中神物、若比丘僧財物、教人行盜、見人行盜代其喜。

HD. vol. 1, p. 1286, b 寺院 cf. 『晋書』「王恭伝」(A.D. 644 ca.)

【寺】HD. vol. 2, p. 1249, a 衙署；官舎 cf. 『漢書』「元帝紀」(A.D. 78 ca.)

「仏寺」に関しては、平川彰著作集第4巻『初期大乘仏教の研究II』春秋社1990年(p.90, p.190)が詳しい。結論から言うと、平川氏は「仏寺」の原語としてSkt. stūpaを挙げておられる。氏の見解に従い、ここでは「仏寺」を「仏塔(Skt. stūpa)」と訳した。しかし、『大阿弥陀經』(T.12, p.310. a,17-18 c,12)や、『無量清淨平等覺經』(T.12, p.292. a,9 c,2)には「作仏寺起塔」(仏寺を作り塔を建てる)とあり、ここでの「仏寺」は「仏塔(Skt. stūpa)」とは考えられにくい。どちらかと言えば「僧院(Skt. vihāra)」ではなかろうか。けれども「仏寺」と「塔」が同様の意味を持つ場合もある。例えば、竺法護訳『正法華經』(T. 9, p. 101. b, 25)に「仏寺」とあり、これに対応する箇所が鳩摩羅什訳『妙法蓮華經』(T. 9, p.31. c, 2)では「塔」と訳されている。『妙法蓮華經』に対応する梵本では、Skt. tathāgata-caityaとなっている。

cf. *Saddharmapundarika* (BIBLIOTHECA BUDDHICA. X ed. by H. Kern. B. Nanjio 名著普及会 1977 p. 232)

- (2) 【神物】身自盜仏寺中○○、若比丘僧財物、教人行盜、見人行盜代其喜。

HD. vol. 7, p. 866, a 神靈、怪異之物 cf. 『易經』「繫辭上」(周～春秋時代)

「仏寺中神物」とは、「仏塔中の神聖な物」という意味である。しかし、具体的に何を指しているか、筆者には判断がつかない。

- (3) 【身自輕秤、小斗、短尺欺人、以重秤、大斗、長尺侵人、見人侵人代其喜。】

ほぼ同様の表現が、諸經に見られる。

- ・安世高訳『分別善惡所起經』(T. 17, p. 518. a, 14-16)

“偷盜劫，人強取他人財物，求利，不以道理欺詐取財物。輕秤、小斗、短尺欺人，若以重秤、大斗、長尺侵人。～”

(「盗みの[はびこる]時代、人は他人の財物を力ずくで奪い、利益を求め、決まりに従わず、欺き騙し財物を受取ります。軽い秤や、小さな升や、短いものさし

で人を欺き、あるいは重い秤や、大きな升や、長いものさしで人を騙します。
～)」

- ・ *Saddharmapundarika* (H. Kern. B. Nanjio前掲書 p.402)

yā gatis tula-kūṭānām māna-kūṭānām ca yā gatiḥ/
tām gatiṃ pratigacched yo dharma-bhānakam atikramet//

「秤で騙す者達の境遇や、ものさしで騙す者達の境遇があります。法説師を傷つけようとする者は、その境遇に赴くはずです。」

- ・ 鳩摩羅什訳『妙法蓮華經』(T. 9, p.59. b, 15-16)

“斗秤欺誑人 調達破僧罪 犯此法師者 当獲如是殃”

「升や秤で人を欺く[罪や]、デーヴァダッタの[ような]破僧の罪があります。この法師を傷つける者は、そのような罪を得るはずです。」

なお「秤」は重さを示し、「斗」は容積を示し、「尺」は長さを示す。一括して度量衡の意味である。

- (14) 【故賊】身自〇〇，教人故賊，見人故賊代其喜。

「故賊」の「故」を「故意に」と理解した。このような「故」の例として、仏陀耶舎共竺仏念等訳『四分律』中の「故作」(T.22, p.698. b) や 仏陀什等訳『弥沙塞五分戒本』中の「故妄語」(T. 22, p.197. a) がある。

cf. 中村元『仏教語大辞典』東京書籍 昭和56年 p.348

- (15) 【見人…代其喜】

「見人…代其喜」の定型句が、C (T. 24, p.1090. a, 15-b, 17) で見られる。この「代其喜」や「助其歡喜」は「立場を変えて喜ぶ」、つまり「我がことのように喜ぶ」といった意味である。この表現は特に古訳に見られ、「隨喜」(Skt. anu-modanā; 他人の喜びを自分の喜びとする)を述べる際に使用されることが多い。同様の表現が、支婁迦讖訳『般舟三昧經 (三卷本)』(T. 13, p.909. c, 29-p.910. a, 1)、『三曼陀跋陀羅菩薩經』(T. 14, p.667. c, 9)、支婁迦讖訳『雜譬喻經』(T. 4, p. 500. a, 20)、支婁迦讖訳『道行般若經』(T. 8, p. 466. a, 3) などに見られる。

- (16) 【更】身諸所〇以来，生五处者。

HD. vol. 1, p. 526, a 受、接受 cf. 『論衡』「禍虚」(A.D. 90 ca.)

「更」には「接触」「経験」という意味がある。この語が境遇を示す表現中で使用されると、「ある境遇に触れる」「ある境遇を経験する」、つまり意識すれば「ある境遇に生まれる」と理解できる。例えば、『大阿弥陀經』(T. 12, p. 301. c, 7)

「皆令不〇泥犁、禽獸、薛荔。」((彼等は)誰も地獄や鳥獸や餓鬼に生まれませんように。)である。『舍利弗悔過經』中のこの箇所も、「接触」「経験」の意味を基本とし、和訳に際しては「生じる」とした。

cf. 齊藤隆信「『浄度三昧經』と竺法護訳經典」『佛教大学総合研究所紀要』第4号 1997年 p. 36上段

cf. 辛嶋静志「『大阿弥陀經』願文訳」『教化研究』117 1997年 p. 141下段

- (17) 【五処】身諸所更以来，生○○者。在泥犁中時，在禽獸中時，在薜荔中時，在人中時，身在此五道中生時，所犯過惡。

原文では「五処」とあるが、文脈から「五道」と訳した。この直後では「五道」と訳されており、語彙の統一が乱れた箇所である。

- (18) 【從】願○十方諸仏，求哀，悔過。

HD. vol. 3, p.1002, b 19(3)向。介紹動作行為發生的対象 cf. 『吳越春秋』「勾踐陰謀外伝」(後漢)

「從」を対象を示す虚詞と理解し、「從十方諸仏」を「十方の諸仏に」と訳した。

『舍利弗悔過經』では、他の例として「所以○十方諸仏求哀者何？」(T.24, p. 1090, b, 15)、「諸十方欲般泥洹者，某等願○求哀。」(T. 24, p. 1091.a, 8)がある。cf. 董志翹・蔡鏡浩著『中古虚詞語法例釋』吉林教育出版社 1994年 p. 78

- (19) 【令】○某等今世不犯此過殃。

「令～」で、願望を示す表現と理解した。この様な例として、『大阿弥陀經』(T. 12, p.301. a,24-25)「使某作仏時，○我国中無有泥犁、禽獸、薜荔、蜎飛蠕動之類。」(もし私が仏になったなら、私の国には、地獄や鳥獸や餓鬼や飛ぶ虫・這う虫などがいませんように。)がある。『舍利弗悔過經』では、他の例として「○某等後世亦不彼此過殃。」(T. 24, p.1090. b, 14-15)、「○某等作仏道行仏經。」(T. 13, p. 1091. a, 28-29)がある。

cf. 辛嶋静志『『大阿弥陀經』願文訳』『教化研究』117 1997年 p. 140上段

- (20) 【洞視徹聽】仏能○○、○○。

『三曼陀跋陀羅菩薩經』(T. 14, p.667. b, 13-14)に、ほぼ「六神通」に相当する説明があり、そこでの「洞視徹聽」が「天眼通・天耳通」に相当することから、「見通すことや、聞き知ること」と訳した。

- ・『三曼陀跋陀羅菩薩經』(T. 14, p. 667. b, 13-14)

“某諸所作罪，不能得○○、○○，不能得神足飛行，不能得自知宿命，不能得去來之事，不能得梵天音声，不能得身、口、意功德，不能得清淨高行，而不能得具足於功德。～”

(「私の作った多くの罪 [のせいで]、天眼通や天耳通を得ることができず、神通力で飛行することができず、自分の過去世を知ることができず、過去や未来の出来事を知ることができず、梵天の [様な美しい] 音声を得ることができず、身体や口や心 [によって作る] 功德を得ることができず、清らかで優れた行いを得ることができず、功德を身にすることができませんでした。～」)

- (21) 【覆藏】某等有過惡，不敢○○。從今以後皆不敢復犯。

HD. vol. 9, 1262, b 遮掩隱藏 cf. 『百喻經』

これに類する表現が懺悔を説く諸經に見られる。罪の告白後の定型句である。

- ・『三曼陀跋陀羅菩薩經』(T. 14, p.667. b, 21-22)

“自悔責，不敢○○。從今已後不敢復犯。～”

(「自ら懺悔し、決して隠しごとしません。今後、決して[罪を] 犯しません。～」)

・僧伽婆羅訳『菩薩藏經』(T. 24, p.1087. b, 17-18)

“我於仏前一心發露，不敢○○。發露已後誓不敢作。～”

(「私は仏の前でひたすら懺悔し、決して隠しごとしません。懺悔の後、誓って[罪を] 作りません。～」)

・闍那崛多共笈多等訳『大乘三聚懺悔經』(T. 24, p.1092. a, 15-16)

“今於一切仏、世尊前至心懺悔發露，不敢○○。於未來世更不敢作。～”

(「今、すべての仏や世尊の前でひたすら懺悔し、決して隠しごとしません。来世に、再び決して[罪を] 作りません。～」)

(22) 【泥犁禽獸薛荔】若有善男子、善女人，意不欲入○○、○○、○○中者，諸所作過皆當悔過之，不當覆藏。

「泥犁、禽獸、薛荔」は主に支婁迦讖訳に現われる音写語で、「地獄、動物、飢えた者」の意味。しかし、彼の訳經中で必ずしも統一された表現ではない。例えば、『般舟三昧經(三卷本)』中の偈文(T. 13, p.913. b, 10)では、「其人終不墮地獄 離餓鬼道及畜生」となっている。見方を変えれば、後世における付加修正箇所かもしれない。

(23) 【經】不欲生辺地、無仏處、無○處、無比丘僧處、無義理處、善惡處者，皆當悔過，不當覆藏。

三宝を含む表現として「無仏處、無經處、無比丘僧處」とあるので、「無經處」の「經」は「法(教え)」に対応する。さらに『舍利弗悔過經』中には、「不知仏時、不知法時、不知比丘僧」(T. 24, p. 1090. a, 16-17)とあり、これらと照らし合わせても「經」と「法(教え)」との対応関係が理解できる。これら以外に「教え」を意味する例として『舍利弗悔過經』には、「十方仏已得仏，不說○。」(T. 24, p. 1091. a, 5)、「今某等勸勉，使為諸天、人民、蜎飛蠕動之類說○，使脫於泥犁、禽獸、薛荔、愚痴、貧窮，至令得泥洹道。」(T. 24, p. 1091. a, 5-6)、「某等宿命為菩薩時，某等當勸樂諸仏說○。」(T. 24, p. 1091. a, 10-11)、「守我諸天、人民，說○。」(T. 24, p. 1091. a, 11-12)、「若布施，若持經道，若持善意，為仏作善，為○作善，為比丘僧作善，為凡人作善，若為禽獸作善。」(T. 24, p. 1091. a, 21-22)、「令某等作仏道行仏○。」(T. 24, p. 1091. a, 28-29)がある。

(24) 【更生】意不欲愚痴、聾、盲、瘡瘻，不欲生屠，生漁獵、獄吏，○○貧家，皆當悔過，不當覆藏。

HD. vol.1, p. 527, a 新生 cf.『莊子』「達生」(戦国時代)

(25) 【道】欲得須陀洹○不復入泥犁、薛荔中者，皆當悔過。欲得斯陀含○上天作人，欲得阿那含○上二十四天，欲得阿羅漢泥洹去者，欲於世間得阿羅漢○者，欲得辟支仏○者，欲知去來之事者，皆當悔過，不當覆藏。

ここで説かれる「道」は様々な解釈が可能であろう。一つの可能性として「道」を「境地」と理解することができる。例として、〈法華經〉を挙げる。ただ

し、以下に挙げる例は問題点を含んでいる。梵本の下線部分（'nāgāmi -）が諸本によっては省略されており、その有無によって波線部分（phalam）の扱いが異なってくるのである。この点の確認については、『妙法蓮華經』に最も対応する写本参照が必須となるが、ここではSkt. phalaに「道」が対応することを確認するとどめた。

- *Saddharmapundarika* (H. Kern. B. Nanjio前掲書 p. 347)

tasya te sattvās taṃ ca dharmam śṛṇuyuh śrutvā caika- kṣaṇenaika-muhūrtenaika-lavena sarve srota-āpannāḥ syuḥ sakṛd-āgāmīno 'nāgāmīno 'nāgāmi-phalam prāpnuyur yāvad arhanto bhaveyuh kṣīṇāsravā dhyāyino mahā-dhyāyino 'ṣṭa-vimokṣa-dhyāyinaḥ/

- 鳩摩羅什訳『妙法蓮華經』（T. 9, p.46. c, 17-19）

“一時皆得須陀洹道、斯陀含道、阿那含道、阿羅漢道，尽諸有漏，於深禪定皆得自在，具八解脫”

（「一瞬にして、誰もが須陀洹の境地や斯陀含の境地や阿那含の境地や阿羅漢の境地に達し、多くの煩惱をなくし、深い精神統一の中ですべてが意のままとなり、八解脫を備えます。」）

- (26) 【二十四天】欲得斯陀含道上天作人，欲得阿那含道上○○○○，欲得阿羅漢泥洹去者，欲於世間得阿羅漢道者，欲得辟支仏道者，欲知去來之事者，皆當悔過，不當覆藏。

筆者は「二十四天」を欲界六天、色界十八天の総称と理解した。

- (27) 【迴教】十方諸仏皆以中正○○天下人、日月所照人民，使作善。

HD. には採られていないが、後漢代には使用されていた語彙である。筆者は「教えを巡らす」と理解した。

- (28) 【至】譬如天雨百穀、草木皆茂好，仏以經道雨於天下，故生侯王、四天王、上○三十三天上豪貴富樂。

「至」を「乃至 (Skt. yāvat)」と理解した。このような例として『大阿彌陀經』（T. 12, p.306. c, 23）「從第一四天王，上○三十三天上，～」（一番目の四天王から、三十三天の上まで～）がある。この場合、文法的には「從～乃至……」となる。『舍利弗悔過經』では、他の例として「若布施者，若持道動力不毀經戒者，若慈心念人民者，若作善無量者，若施於菩薩及諸比丘僧者，若施凡夫及貧窮者、下○禽獸慈哀者。」（T. 24, p. 1090. c, 8-11）、「諸當來仏教人作善遠離五惡、生死之道，○令得阿羅漢、辟支仏道者。」（T. 24, p. 1090. c, 13-15）、「慈哀人民、蜎飛蠕動之類者，皆令脫於泥犁、禽獸、薛荔、愚痴、貧窮，○令得須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支仏泥洹道。」（T. 24, p. 1090. c, 17-20）、「今某等勸勉，使為諸天、人民、蜎飛蠕動之類説經，使脫於泥犁、禽獸、薛荔、愚痴，貧窮，○令得泥洹道。」（T. 24, p. 1091. a, 5-7）がある。

- (29) 【豪貴富樂】譬如天雨百穀、草木皆茂好，仏以經道雨於天下，故生侯王、四天王、

上至三十三天上○○○○。

【豪貴】HD. vol. 10, p. 32, b 権勢極其顯貴 cf. 『百喻經』

【富樂】HD. vol. 3, p. 1571, b 富裕而安樂 cf. 『史記』「張儀列伝」(B.C. 90 ca.)

「富樂」の和訳の際には、神々の持つ属性として「安樂」の意味を強調した。

(30)【蜎飛蠕動】天下人民、○○○○之類所作好惡。

【蠕動】HD. vol. 8, p. 989, a 爬行的昆虫 cf. 『新語』「道基」(B. C. 2 C ca.)

【蜎飛蠕動】HD. vol. 8, p. 900, a 虫多之属飛翔蠕動而行。借指能飛翔或爬行的昆虫。

cf. 『鬼谷子』「揣」、「淮南子」『原道』(B.C. 2C ca.)

(31)【勤力】若布施者，若持道○○不毀經戒者，若慈心念人民者，若作善無量者，若施於菩薩及諸比丘僧者，若施凡夫及貧窮者、下至禽獸慈哀者。

HD. vol. 3, p. 817, a 勤勞；勞費体力 cf. 『史記』「殷本記」(B.C. 90 ca.)

(32)【經戒】若布施者，若持道勤力不毀○○者，若慈心念人民者，若作善無量者，若施於菩薩及諸比丘僧者，若施凡夫及貧窮者、下至禽獸慈哀者。

「經戒」には、「①教えと戒②教えに基づく戒」といった二つの意味がある。この箇所では②の意味で理解した。『舍利弗悔過經』では、他の例として「今十方現在諸仏所當過度者，教人布施不犯○○。」(T. 24, p.1090. c, 16-17)、「為惡自悔，持○○，不毀。」(T. 24, p. 1091. a, 23-24)がある。

cf. 末木文美士『『法句譬喻經』訳注(19)』『季刊アーガマ』140号 1996年 p.221上段

(33)【施】若布施者，若持道勤力不毀經戒者，若慈心念人民者，若作善無量者，若○於菩薩及諸比丘僧者，若施凡夫及貧窮者、下至禽獸慈哀者。

『舍利弗悔過經』の「施」(T. 24, p.1090. c, 10, 11)と「布施」(T. 24, p.1090. c, 8, 17, 22, 28 p.1091. a, 2, 19)と「施与」(T. 24, p.1091. a, 27)の原語は確認できないが同義である。また、「布施」と「施与」を同義に理解する例として、支謙訳『私呵昧經』がある。『私呵昧經』では、散文で六波羅密が説かれ、その内容を受け偈文で「布施者大施与」(T. 14, p.810. c, 21)と説かれる。ただし『舍利弗悔過經』の「施与」は、「廻向」を意味する文脈中で使用されている。「某等取諸学道以来，所得福德，皆集聚会，以持好心，○○天下十方人民、父母、蜎飛蠕動之類。皆令得其福。」(T. 24, p.1091. a, 25-28)。この点を指摘された研究者に梶山雄一氏がおられる。梶山氏に対し、静谷正雄氏は『舍利弗悔過經』に廻向の思想は現われないとされる。

cf. 梶山雄一「『さとりと』と『廻向』一大乗仏教の成立一」人文書院 1997年 p. 188-189

cf. 静谷前掲書 1974年 p.130

(34)【勸】某等○其作善，助其歡喜。cf. 注(15)

HD. vol. 2, p. 825, a 奨勉；鼓勵 cf. 『易國語』「越語上」(春秋時代)

『舍利弗悔過經』中の「勸」(T. 24, p.1090. c, 12)は、「勸樂」(T. 24, p.1090. c,

15, 20, 25, 26, 28 p.1091. a, 11, 24) や「勸勉」(T. 24, p.1091. a, 5, 25) と同義と考えられる。

【勸樂】HD. vol. 2, p.828, b 歡樂 cf.『礼記』『礼器』(戦国時代～漢代初頭)

【樂意】HD. vol. 4, p.1295, a 願意 cf.『二刻拍案惊奇』

このように「樂」には「願う」という意味があり、「勸樂」を「勸め願う」、つまり「鼓舞する」と理解した。

【勸勉】HD. vol. 2, p. 826, b 勸導勉勵 cf.『管子』『立政』(春秋時代)

「勸勉」は「勸め励ます」、つまり同様に「鼓舞する」と理解した。

しかし経中では「勸樂」「勸勉」は使い分けられている。「勸樂」は「某等○○、助其歡喜。」のように、主に「随喜(Skt.anumodanā)」を述べる際に使用される。「勸勉」は「今某等○○、使為諸天、人民、蜎飛蠕動之類説経、使脱於泥犂、禽獸、薛荔、愚痴、貧窮、至令得泥洹道。」のように、「勸請(Skt. adhyeṣaṇa)」を述べる際に使用される。

(35)【勸…助其歡喜】某等○其作善, ○○○○。 cf. 注(15)(34)

「随喜(Skt. anumodanā)」を示す表現である。

(36)【所可】諸過去仏○○過度人民得泥洹者, 某等皆助其歡喜。

「所可」=「所」の例である。この様な例として『三曼陀跋陀羅菩薩經』(T. 14, p.667. a, 4)「其有於一切諸仏、諸菩薩、諸迦羅蜜、諸父母、諸阿羅漢、諸辟支仏、一切諸人○○誹謗者、～」(私がすべての仏や、菩薩達や、善知識達や、父母達や、阿羅漢達や、辟支仏達や、すべての人に非難されても、～)や、同經(T. 14, p.667. b, 28)「如是者○○自帰、為已自帰也。」(この様に帰依したなら、それがすでに帰依したこととなるのです。)がある。

cf. 董志翹・蔡鏡浩著『中古虚詞語法例釋』吉林教育出版社 1994年 p.315

(37)【過度】諸過去仏所可○○人民得泥洹者, 某等皆助其歡喜。

「救済」を意味する語彙。丘山新氏は「過度」を他動詞として「救済」の意味で使用するの、後漢代からとされる。『舍利弗悔過經』では、他の例として「今十方現在諸仏所当○○者, 教人布施不犯経戒。」(T. 24, p. 1090. c, 16-17)がある。

cf. 丘山新『『阿弥陀過度人道経』一経題とその思想一』『印度学仏教学研究』35-1 1986年 p. 69下段

(38)【五惡生死之道】諸当来仏教人作善遠離○○、○○○○, 至令得阿羅漢、辟支仏道者。

同様の表現を筆者は未確認であり、仮に「五惡や輪廻の境地」と訳した。しかし、「五惡趣」とも理解できる。

(39)【助】某等皆○。cf. 注(15)(34)(35)

どの諸版も「某等皆助。」である。しかし、文脈は明らかに「随喜(Skt. anumodanā)」であり、「其歡喜」を補い「某等皆助 [其歡喜]。」と理解した。

(40)【如】某等勸樂, 使作善, 令○仏。

「使作善，令如仏。」を「善を作らせ、仏のようにさせます」と理解したが疑問が残る。「如」には「随順」の意味があり、「善を作らせ、仏に従わせます。」とも理解できる。いずれにせよ、筆者は良く理解できなかった。

HD. vol. 4, p.269, a ①随順 cf. 『公羊伝』「桓公元年」(戦国時代)

- (41)【当】今十方現在諸仏所〇過度者，教人布施不犯戒戒。

漢訳仏典では「常」・「当」・「尚」の混乱がしばしば見られる。「当」「常」の混乱例として、『正法華経』(T. 9, p.107. a, 17)、『大乘三聚懺悔経』(T. 24, p.1091. c, 16)、『菩薩本業経』(T. 10, p. 448. a, 27) など多数ある。「尚」と「常」については、『大阿弥陀経』(T. 12, p.308. c, 7) と『無量清浄平等覚経』(T.12, p.281. b, 15) の比較から理解できる。

この様な諸例に基づき、ここや、「某等宿命為菩薩時，某等〇勸衆諸仏説経。」(T.24, p.1091. a, 10-11) の「当」を「常」と理解した。ただし、それを支持する『舍利弗悔過経』諸版はない。

- (42)【道禁】行“檀波羅蜜”、“布施”、行“尸波羅蜜”、“不犯〇〇”、行“羼提波羅蜜”、“忍辱”、行“精進 (v.l. 惟逮) 波羅蜜”、“精進”、行“禪波羅蜜”、“一心”、行“般若波羅蜜”、“智慧”、成六波羅蜜。

HD. vol. 10, p. 1080, b ①有関道路通行的法令 cf. 『周礼』「秋官」(春秋時代) ②仏教的禁忌 cf. 『宋書』「夷蛮伝」

本来「道禁」は、「交通法規」に関する語彙である。しかし仏教伝来に伴い、仏典にその語彙が踏襲され、そこでは「戒 (Skt. śīla)」を意味する。

この箇所では音写語で六波羅蜜が述べられており、その各項目ごとに語注が紛れ込んでいる。どの諸版にもこの語注があり、それが訳者によるものか、あるいは後世の付加か、筆者には判断がつかない。また、「精進波羅蜜」については、記述が「精進波羅蜜」(高麗蔵、房山石経) と「惟逮波羅蜜」(宋碕砂蔵) の二系統に分かれている。「音写語—語注」という流れに従うなら「惟逮波羅蜜」を採るべきであるが、筆者は高麗蔵をもとにした大正蔵の記述に従った。

- (43)【過去若菩薩】諸〇〇〇〇〇奉行六波羅蜜。

諸版すべてがこの読みを支持しており、「過去若菩薩」の意味は不明である。筆者は、「若」を写経者の誤りと推測したが、他に正しい理解があるかもしれない。

- (44)【辟支人】皆令得仏福得〇〇〇。

どの諸版もこの読みを支持しており、「辟支人」の意味は不明である。

- (45)【四大城】持〇〇〇金、銀、宝物，持用布施，百倍、千倍、万倍、億倍。

どの諸版もこの読みを支持しており、「四大城」の意味は不明である。しかし、「域」が誤って「城」となった可能性もあり、ここでは「四大城」を「四大洲」の意味で理解した。ただし、筆者は「域」と「城」の交代例をまだ確認していない。

- (46)【持・持用】〇四大城金、銀、宝物，〇〇布施，百倍、千倍、万倍、億倍。

「持」の基本的意味は「保つ・持つ」である。この意味での「持」は、「若布施者，若○道勤力不毀經戒者，若慈心念人民者，若作善無量者，若施於菩薩及諸比丘僧者，若施凡夫及貧窮者、下至禽獸慈哀者。」(T. 24, p.1090. c, 8-11)、「若布施，若○經道，若○善意，為仏作善，為經作善，為比丘僧作善，為凡人作善，若為禽獸作善。」(T. 24, p. 1091. a, 20-22)、「為惡自悔，○經戒，不毀。」(T. 24, p. 1091. a, 23-24)である。しかし、「持」が、手段・原因・理由を意味する場合があります、ここの「持」「持用」は、その中の手段の意味で理解した。他經の例として『大阿彌陀經』(T. 12, p.301. c, 26)「欲得自然万種之物，即皆在前，持用供養諸仏，～」(彼等が)自然に(生じる)あらゆる種類の物を得たいと欲すれば、なんでもすぐさま目の前に現れ、それで仏たちを供養して、～)がある。また、『舍利弗悔過經』中には「以持」で手段を意味する場合もある。「某等取諸學道以來，所得福德，皆集聚會，○○好心，施与天下十方人民、父母、蜻飛蠕動之類。」(T. 24, p. 1091. a, 25-28)。

cf. 辛嶋静志『『大阿彌陀經』願文訳』『教化研究』117 1997年 p. 142下段

cf. 松村巧『『法句譬喻經』訳注(8)』『季刊アーガマ』130号 1994年 p. 252下段

(47)【過】当昼夜各当三○首為十方仏拝言：～

HD. vol. 10, p. 954, b ㊟量詞。遍 cf. 『素問』『王版論要』

「三過」の「過」を量詞と理解し、「三度」と訳した。『舍利弗悔過經』では、他の例として「其供養天下阿羅漢、辟支仏千歳，不如持『悔過經』昼夜各三○読一日。」(T. 24, p. 1091. b, 7-9)がある。

(48)【仏】十方仏已得○，不說經。

ここの「仏」は「悟り (Skt. bodhi)」の意味である。このような例が、〈法華經〉に見られる。

・ *Saddharma-puṇḍarīka* (H. Kern. B. Nanjio前掲書 p. 35)

devās ca nāgās ca sa-yakṣa-rākṣasāḥ koṭi-sahasrā yatha gaṅga-vālikāḥ/
ye cāpi prārthenti samagra-bodhiṃ sahasraśītiḥ paripūrṇa ye sthitāḥ. //31//

(「夜叉や羅刹達を伴った、ガンジス河の砂 [の数] に等しい千コーティもの神々や龍神達います。さらにまた、優れた悟りを求める者達があり、彼ら八万人が充滿し住しています。)」

・ 『妙法蓮華經』(T. 9, p.6. c, 4)

「諸天龍神等 其数如恒沙 求○諸菩薩 大数有八万」

(「神々や龍神達は、その数ガンジス河の砂 [の数] に等しい。悟りを求める菩薩達は、大勢で八万人に及びます。)」

なお、『正法華經』(T. 9, p.69. a, 13)では、下線部に対応する箇所が「尊仏道」となっている。これは「仏道」で「悟り」を示す例である。

(49)【曉】無數諸天○我。

HD. vol. 5, p.832, b ㊟告知使明白；開導 cf. 『報任少卿書』

(50)【為】当何以願○得之？

ここの「為」や、「使天下男子、女人皆○得阿羅漢、辟支仏、若有人供養天下阿羅漢、辟支仏千歳。」(T. 24, p.1091. b, 3-5)中の「為」を筆者は、良く理解できなかった。

(51)【学道】某等取諸○○以来，所得福德，皆集聚会合，以持好心，施与天下十方人民、父母、蜎飛蠕動之類。

HD. vol. 4, p.249, a ①学習道藝，即學習儒家学説，如仁義礼楽之類。cf.『論語』『阳貨幣』（春秋時代末），『史記』『仲尼弟子列伝』（B.C. 90 ca.）②学習道行。指学仙或学仏。cf.『漢書』『張良伝』（A.D. 426 ca.）

本来「学道」は、儒教と関連する語彙である。しかし仏教伝来に伴い、仏典にその語彙が踏襲され、そこでは「仏道修行」を意味するようになる。

(52)【取】某等○諸学道以来，所得福德，皆集聚会合，以持好心，施与天下十方人民、父母、蜎飛蠕動之類。

HD. vol. 2, p.871, b ①採取；選抜 cf.『易経』『繫辭下』（周～春秋時代）

(53)【集聚会合】某等取諸学道以来，所得福德，皆○○○○，以持好心，施与天下十方人民、父母、蜎飛蠕動之類。

【集聚】HD. vol. 11, p.801, d 会合；聚会 cf.『易林』『訟之咸』

【合会】HD. vol. 3, p.156, b ②聚集；聚会 cf.『聿鉄論』『水旱』

(54)【好心】某等取諸学道以来，所得福德，皆集聚会合，以持○○，施与天下十方人民、父母、蜎飛蠕動之類。

HD. vol. 4, p.283, b ①忠心 cf.『隋書』『列女伝』（A.D.7C ca.）

(55)【少所】有餘○○，令某得之。

「少所」ではHD. に採られていない。筆者は「少所」を「少許」で理解した。

【少許】HD. vol. 2, p.1653, b 少量 cf.『抱朴子』『黄白』（A.D. 317 ca.）

「所」と「許」の交代例については、辛嶋静志氏の論稿を参照。

cf. 辛嶋静志「漢訳仏典の漢語と音写語の問題」（高崎直道／木村清孝 [編] シリーズ・東アジア仏教 第5巻『東アジア社会と仏教文化』春秋社 1996年）p.206

(56)【諸未度者，某当度之。諸未脱者，某等当脱之。諸未得泥洹者，某等当令得泥洹。】

同様の表現の一部を以下に示す。

- ・『三曼陀跋陀羅菩薩經』（T. 14, p. 668. a, 21-23）

“一切人未度者，我当度之。未脱者，我当脱。未般泥洹者，我当令般泥洹。～”

（「すべての人の中で救済されていない者を、私はきっと救済します。〔輪廻から〕逃れていない者を、私はきっと解放します。般泥洹していない者を、私はきっと般泥洹させます。～」）

- ・『法鏡經』（T.12, p.15. b）

“未度者，吾当度之。未脱者，吾当脱之。不安隱者，当慰安（*v.l.* 隱安，安隱）之。

未滅度者、吾当滅度之。～”

（「救済されていない者を、私はきっと救済します。〔輪廻から〕逃れていない者を、私はきっと解放します。安らかでない者を、きっと慰めます。滅度していない者を、私はきっと滅度します。～」）

この様な表現は「四弘誓願」に関係するものである。体系だった「四弘誓願」の研究に、香川孝雄『浄土教の成立史的研究』山喜房佛書林 1993年（pp.461-475）がある。

(57) 【寧～不】其福○多○？

【寧】HD. vol. 3, p.1599, b ㊦ 豈不，難道不 cf. 『左伝』「成公二年」（前漢末？）

「寧～」には反語の意味の他に、「寧～不」の形で疑問を表わす場合がある。

cf. 神塚淑子「遊行経（五）注」p.552下段（『現代語訳「阿含經典」一長阿含経』第1巻 平河出版社 1995年）

cf. 引田弘道「遊行経（八）注」p.639下段（『現代語訳「阿含經典」一長阿含経』第1巻 平河出版社 1995年）

cf. 末木文美士「典尊経 注」p.223上段（『現代語訳「阿含經典」一長阿含経』第2巻 平河出版社 1997年）

(58) 【持】其供養天下阿羅漢、辟支仏千歳，不如○‘悔過経’ 昼夜各三過読一日。cf. 注(46)

「持」を動詞と理解すれば「記憶する」となるが、虚詞の可帯性もある。その場合、「～『〔舍利弗〕悔過経』を、昼と夜それぞれ～」となる。

